

氏名	柴田 早穂
ヨミガナ	シバタ サホ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第576号
学位授与年月日	平成30年3月26日
学位論文等題目	〈論文〉 「空っぽ」という死生観 〈作品〉 満ちて空っぽ 〈演奏〉

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	赤沼 潔
（論文第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	片山 まび
（作品第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	藤原 信幸
（副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	谷岡 靖則
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	

（論文内容の要旨）

いかなる生命にも必ず訪れる死。かつて死にゆく姉を前にして漠然とした死への恐怖に縛られ、身動きすることができなかつた。そして、その死を受け止めきれず、精神的な拠り所をもたない心は不安定に揺れ動き、悲しみの中にずっと佇んでいた。普段は心の奥深くにしまっている、姉の喪失に対する悲しみと、死への恐怖に怯え、病気を宣告されてからの姉と過ごす時間のなかで姉の心に寄り添うことができなかつたという後悔は、心の緊張を少しでも緩めると、途端に堰を切ったように溢れ出してくる。しかし、どんなに深い悲しみの淵にいても、日々のふとした瞬間に脈々と続く生命の巡りを感じるとき、身体の奥から静かに湧き上がる、揺れ動くような躍動感を覚えずにはいられない。私にはそれが生命が根源的にもっている「光」であると感じられる。この光は、生きていく苦悩の先に求める希望や救いの光のように、どこかへ導いてくれる指針となるような光ではなく、すべての生命が自ら望まなくとも、生まれながらにして持っている侵すことのできない領域のようなものである。その領域では、生と死の意味を問うようなこともなく、世界の善悪をより分けることもない。その「光」が満ちた中には、ただ生命が存在しているということのみがある。記憶のなかに「光」が積み重なっていき、満ちていく大きな広がりを感じたとき、それは「満ちた」状態でありながら、「空っぽ」なのであると感じた。そして、その「空っぽ」は、生命そのものであると感じている。時間や物質などの様々な境界を超えたつながりを享受しながら「空っぽ」を生きているという感覚は、生と死、自身の存在、生命のあり方への、新たな思いを育んでいく。

制作の課程で、自身が生かされている世界の姿が、自身を通して現れてくる。それは、はっきりとした輪郭を持つわけではなく、漂う気配のようなものである。制作過程での行為がもたらすものは、イメージを現実のものとするのではなく、意識と無意識の界面を漂いながら空間に刻まれていく痕跡との思索の時間である。自身と制作との関係には、次にあげるような鑄造の過程による五感への作用、及び精神的な作用が密接に関わっている。環境や体温などの細やかな温度変化・重力によって可変していく素材の感触・造形・質感。原型を包む型の、原型の周りの空気をゆるやかになぞるような、必然と偶然

から成る造形に覚える心地良さ。最終的な造形が不在のままに過程が進行していき、「有る」と「無い」を常に同居させている不安定な状態。坩堝の中で熱と光を放ちながら熔け落ちて混ざり合う金属に感じる原始的なエネルギー。研磨されて再び輝き出す瞬間の妖しく揺れ動くように見える金属素材の確かさと不確かさを兼ねた存在。これらのことから作品が生まれるとき、「光」「空っぽ」という死生観を体現していると感じられる。

「光」「空っぽ」の表現として、その過程が引き起こす精神的作用が死生観に深く関わっている「鑄造」を用いて空間への痕跡を緩やかに刻む。また、造形とともに重要である制作過程での思索の時間に体験するイメージの広がりや、「光」を感じる様々な素材を用いて表現する。

以上のような思想を踏まえて述べようとする内容は、生と死に端を発する「光」「空っぽ」「巡り」というキーワードを中心とし、以下のとおりの章構成である。

第1章「空っぽにある光」では、姉の死を経験した直後の作品から、博士審査展出品作品までの制作を通して、変化していった死生観が「空っぽ」に至る経緯を辿る。そして、「光」「空っぽ」についての定義を述べる。

第2章「素材・行為・表現」では、鑄造との出会いと、死生観に大きく影響している鑄造の背景への想像から広がる、時間や物質などの様々な境界を超えたつながりについて考察する。また、実際の制作工程を記述し、プロセスから生まれてきた思考について具体的に述べる。

第3章では、博士審査展提出作品について論じる。「空っぽ」という死生観をより具体的に探りながら、同時に進行していく制作工程について、双方を関連づけながら詳述する。自身の存在と生命のあり方についての考察の場として、自身の日常に対して少しの非日常を設け、その体験から導かれた思考をもとに、生物学的な生命観や、自然科学的な生命の連鎖についての考察を踏まえながら自身の考えを述べる。

最後に、本研究において用いた表現を通して、表現の意義とこれからの作品制作の展望について述べ、本論文を総括する。

#### (論文審査結果の要旨)

柴田早穂氏の論文は、姉の死を受けとめていくなかで深く醸成された独自の死生観、「空っぽ」という概念について自作をもとに論じられた内容となっている。周知のとおり死生観については、古今東西をとわず数限りない考察と議論がなされてきた。これらに対して同氏の論考は、鑄金作家のみが言いえる死生観を丹念に自らの言葉でつづった点で高く評価される。

本論文の構成は3章からなる。第1章では独自の死生観である「空っぽ」の定義がなされる。すなわち「空っぽ」とは、生と死を生み出す、いわば生命そのものであり、その内側は超大なエネルギーである「光」に満たされていることが論じられる。あわせて、それらの概念にいたるまでの過去の自作や思いが丹念につづられ、深い悲しみを克服していく過程を読み取ることができる。つづく第2章は、1章での定義が鑄造過程と結び付けられ、本論のなかできわめて注目される部分となっている。つまり「空っぽ」とは鑄型のことであり、「光」とはそこに注がれる湯のことであり、鑄造のプロセスこそは独自の死生観に結びついていることが論じられる。第3章は、博士提出作品についてのコンセプトやプロセスを論じた章である。第1章と比較して読むと、内に深くこもっていた同氏の思いが、今度は外に向かって発信されつつあること、博士提出作品が新たなステージの始まりであることが理解できる。

論文指導においては、同氏より、ひとつの考えにまとめるよりも、都度の思いや意識を重視したいとの希望があったため、スケッチするように文章を積み重ね、またそれについて会話を重ねることを提案した。そのため論文としての全体のまとまりや、論の運びにやや難のある部分も残されている。しかし、スケッチ的な作文による過去と現在を織りなす思いの探求が、結果としては博士提出作品の制作につながった。以上のように論文が作品の背景を十分に説明するものであること、鑄金の立場から果敢に普遍的な概念を論じた新鮮な内容から、審査員の同意のもと博士学位に相当するものとして意見の一致をみた。

#### (作品審査結果の要旨)

本提出作品は、金属による鑄造作品とガラスを用いた宙吹き作品および、たんぽぽの種子などを構成したインスタレーションとして提出された。真鍮及びブロンズの銅合金による金属作品は、鑄肌や磨き上げた表情など、独特で多様な表情を見せ、鈍く光を反射する様子は、論文中の「空っぽにある光」をまさに体現しているように、不思議な光を放っている。「たんぽぽの種子」を入れたガラスの器は、自らガラス工房において自身で吹いて作ることで、独特の歪みや肉厚の不揃いを生み出し、中に入っているものの姿を、微妙に歪ませる。そのようなディテールが、生死の狭間の不思議な世界を感じさせている様で、作品に奥行きを与えていると感じた。制作物ではなく、自然物である「たんぽぽの種子」の持つ生命の発芽を予感させるものが、金属やガラスという無機質なものと対比が、かえってそのような無機質な素材が表現している「不思議ないきもの」をリアリティーのあるものにしていていると思う。

最前面に設置された、主となる大きなうさぎの頭部の作品は、鑄造作品としては大きな力作であり、大変な重量物であるはずがその形体、表面の光り方やテクスチャーによって、軽い浮遊感を感じさせるという、視覚的効果をもたらしている。又、小さな作品群も、それぞれ見ごたえのある造形が施され、展示空間全体を、インスタレーションとして設定したことで一見、「日常の普通の空間に出現した不思議な世界を表現したい」という作者の狙いが上手く表現されていると評価した。

自身の個人的な体験から来る独特な死生観は、論文の中では幾分抽象的で、本人の思いと読者である私自身の間に、何かしら少しの距離感というものを感じさせていたのだが、作品を見て初めて、なるほどこういうことかと、理解が進み納得ができた。

「素材と独特な形態」の大胆で細やかな表現が丁寧に行われていることで、好ましく感じられる作品となっている。

#### (総合審査結果の要旨)

申請者は、審査論文[「空っぽ」という死生観]の中で、身近な死の体験を経て自身の中に沸き起こる感覚と感情の渦の中から立ち上がってきた死生観とは「光」と「空っぽ」であると定義し、それぞれ論じている。ここでの「光」とは物理的な光を意味するものではなく、個人の感覚に由来する精神的なものとして捉え、生と死を超越した巨大なエネルギーであるとしている。また、「空っぽ」については、生命が持つ「光」が満ちた何もない広がりであるとし、自身の研究内容である鑄造との関係と絡ませ、この中で「空っぽ」は生と死の出発点であり終着点でもあるまさに鑄型であるとの捉え方と、熔解した金属に「光」を感じ取り、その時間的流れによる静寂と動勢からの文章展開は、鑄造を実際に経験している者の心の奥に響くものであった。全体的に繊細な感情が散りばめられ、独自の死生観の領域に踏み込んでいる内容は評価できる。

本審査作品[満ちて空っぽ]は、石膏鑄造法による真鍮の鑄物で制作した大形のウサギの頭部を中心にして室内の様な場を設定し、柔らかな光に包まれたような空間を大切にしたいインスタレーション作品である。ウサギの像は随所に大小様々な表情を持って配置され、壁面にはドローイングも掲げられている。また、生命をつなぐ存在として宙吹きのガラスの器の中にたんぽぽの綿毛を用いている。モチーフのウサギは、食べる・食べられる関係から存在を問う事の象徴として配置され、真鍮の鈍い光を纏い、「光」と「空っぽ」を表現している。たんぽぽの綿毛は「光」でありエネルギーの象徴として用いられた。作品全体から感じ取れる温かい印象の裏にある残酷性を凌駕したいのちの繋がりや、穏やかな表情のウサギたち本体に隠された熱気を読みとると、全体的に拡がりをみせ始め、独自の時間の流れを感じさせられる作品であり、高く評価された。

総合的には、準備不足の感は否めないところであったが、時間をかけてじっくりと仕上がってくる内容は魅力的なものであった。鑄金技法の高度な展開や、自身の表現する内容をより高めようとした姿勢を高く評価し、また、全審査員から博士学位を認める条件を満たしていると判断された。